オムスクでの日食觀測 (A)

花山天文臺第5日食觀測隊長
山本一清

(1)

かねがね吾輩の宿望であつたコロナ變動の觀測の好機會として，こんどの日食に世界的の觀測陣を張らうといふ計畫が，(最初の理想通りにはならなかつたけれど) 目的の一部を達して，滿洲とシベリヤとに觀測隊を送ることになつたのは，喜ばしいことであつた.

歐亞大陸を横斷する此の皆既日食のため，吾々が日本人であるためとは言へ，只，誰もかれもが，皆，せまい北海道に集まつて了ひ，若し天氣が惡ければ，北海道全部が不成功に終るかも知れない冒險をやることは愚策である——と同時に，元來，國境を超越してゐる筈の學者たちが，やはり國境線に制限されて，心臟の弱さを曝露するのも，天文學上からは膽の小さいそしりを免れない！

日本人として，こんどの日食に，吾々花山天文臺のみが大膽な一種の大陸政策を實行し得たことは，吾々の誇りであつた.——尤も，仕事らしい仕事に，多少の冒險が伴なうのは止むを得ない.

(2)

いよいよ，シベリヤへ，オムスクへ行くといふ決心がつき，諸種の手續も終り，とにかく先發として稻葉君と自分とが京都を立つたのは6月3日の朝9時52分であつた. 其の前日，自分を賴つて京都に着いたばかりのチエコスロヴキヤの觀測隊一行に，今は，吾々が同じ驛頭で見送られる身の上である. 汽車が搖ぎ出す時，一聲高く "nice trip!!" と叫んだスロヽカ博士の聲が，ながく耳に殘る.

汽車はひた走りに西へ走る. 21時に下關着，すぐ關釜連絡船景福丸に乘りかへ，船室で眠るうちに，翌4日6時30分釜山着. 又，直ちに「ひかり」に乘り移り，朝鮮路を行く.

15時，京城驛でオリンピツク競技にベルリンへ行く我が日本のマラソン選

手や，水上及び馬術關係者，合計10人ばかりが同じ汽車に乘り合はせたので，其れからは各驛で此の選手たちの見送りが賑やかで，吾々も何だか愉快になつた．

夜半，鴨綠江を渡り，安東で稅關檢査．それから汽車は滿洲に入る．翌5日の朝7時に奉天驛でオリンピツク團は一時下車したが，吾々は尙ほ乘り續けて，14時に新京着．はからずも，滿洲班として先着してゐた栗原講師・上谷理學士其の他の人々に迎へられ，一旦ヤマトホテルに入る．それから恰も滯留中の新城博士をホテルに訪ね，16時からは大陸科學院長直木博士の御招きにより座談會及び晩餐會に參列．20時宿に歸つた．

次で同じ6月5日23時堀井君と3人新京出發，翌6時20分ハルビン着．北滿ホテルに入り，更に帝國領事館とソビエト領事館とを歷訪して，堀井君の旅券査證のことを依賴した．午後は Y. M. C. A. のジョルゲンセン氏の來訪を受けた．

6月7日朝8時ハルビン發の國際列車に乘り，翌8日12時滿洲里着．一旦ニキチンホテルに入つて休息し，17時いよいよシベリヤ鐵道に乘り込み，滿洲里出發，20分後，サ國第86番國境驛 Otpor に着．こゝで2時間以上停車．嚴密な稅關檢査があつた．しかし，吾々日食隊員は，サ國官吏たちが目的を完全に理解してくれてゐたので，些の不便もなく，總ての手續きも極めて簡單にすんだ．

汽車は2等客以下の稅關檢査を續行しつゝ，22時にオトボル驛を出發．淡暗がりの中を西へ進む．

吾等は，稻葉君と2人で小室を獨占してゐるので，何かにつけて便利である．（つゞく）

詩　"曇雨の部分食"

東京　稻垣武五

濁流に似た雲のフイルタ1．氣まぐれな風はプログラムにない幕間を作る．仰ぐと白晝の三日月は白い．人達は色硝子と肉眼とを比較する．

ラジオの感激報告．日蝕寫眞を知つてゐる人は球面天文學を想起しない．切れぎれの部分蝕．人達は寫眞乾板になつてしまふ．奇遇の太陽を奇遇の雨が隱した．そして新聞社でジアナリストが日蝕を再生し出した．